

渋川郷学 5人の師匠たち ～ゆかりの地めぐり～

1 山崎石燕墓所

雙林寺(中郷地内)

山崎石燕は北牧宿(現渋川市北牧)に生まれ、幼い頃から学問を好み、下仁田村の高橋道斎に国学を、江戸に出て井上金峨に儒学を学びました。帰郷して塾を開き、基礎的な学問を教えるなど子弟の育成に尽力しました。この中には吉田芝溪・翠屏兄弟もおり、芝溪のその後の学問の歩みに影響を与えました。

天明5年に77歳の生涯を閉じた石燕の葬儀は、芝溪ら門弟により盛大に行われ、墓は中郷にある禅寺・雙林寺本堂裏の墓地に建てられ、現在は市指定史跡となっています。



雙林寺 …… 山号は最大山、院号は春日院。関東管領上杉氏の家宰である長尾景仲(昌賢、1388～1463)が宝徳2年(1450※)に山城国の月江正文禅師を開山として創建したといわれる曹洞宗の寺院。寺格は一等で、創立当時は僧侶は常に200人を下らなかったと伝わります。現在の諸堂は元禄年間(1688～1704)に再建されたものですが、昔時の面影を残しています。月江正文にちなむ大カヤを含む「七不思議」が知られています。 ※文安4年(1447年)の創建とも

2 吉田芝溪・翠屏兄弟の墓所へ導く道しるべ 御蔭地内

市内には渋川郷学の師匠の遺徳を偲んで弟子たちが建てた顕彰碑や筆子塚などが現在も数多く残り、渋川郷学の師弟関係の深さを今に伝えていています。藍園も師の顕彰碑を建てたり、師の位牌を毎年の盆時期や命日に祀ったりして、尊敬や感謝の気持ちを表したと言います。藍園は直接指導を受けていませんが、吉田芝溪と翠屏(芝溪の弟：子登)を先師として尊敬し、その功績が人々から忘れられることを心配し、芝溪60回忌にあたる明治4年(1871)に、有志らとともに芝溪と翠屏の墓所近くの道に石の道しるべを建てました。



道しるべには次のように刻まれています。

漫遊文章所載

吉田子正・子登両先生墓
自是南在 百有餘歩之外

平沢旭山の書いた漫遊文章という書に出てくる、
吉田芝溪・翠屏両先生のお墓は、
これより南、百有餘歩のところにある

さらに、藍園は、芝溪の師である平沢旭山^{れいがんじ}の墓が東京・深川の靈巖寺にあったので、東京に出ると必ずその墓へお参りに行ったと伝わります。

平沢旭山(1733-1791) 享保18年(1733)、宇治(京都)生まれ。寛政3年(1791)没。享年59
江戸昌平黌で学頭をつとめた。天明5年(1785)に渋川へ遊び、吉田芝溪に乞われて同家に3年余り滞在。
芝溪・翠屏兄弟などを門弟として儒学、国学、詩文などを教授したという。

3 吉田芝溪・翠屏の墓

御蔭地内

吉田芝溪の墓は御蔭に2か所あります。

1か所は道しるべから南に140m程入ったところで、『群馬県指定史跡 吉田芝溪の墓』標識と説明板があります(県指定史跡 昭和26年6月19日指定)。『石像物と文化財』によると、芝溪の墓は正面に「子正吉田先生墓」、裏に「文化八年辛未弟六月十九日」と刻まれており、南隣にある弟・翠屏の墓は、横書きに「翠屏田先生墓」、その下に漢文で略歴が刻まれ末尾に「木暮足翁首再拝謹撰并書」とあるので芝溪・翠屏の門弟である木暮足翁が撰文し書いたと分かり、おそらく芝溪の墓も翠屏の墓も足翁が中心になって建てたものであろうとしています。

この墓所から東約170m程のところ、もう一つの芝溪の墓があり、こちらにも『群馬県指定史跡 吉田芝溪の墓』標識があります。芝溪の墓には芝溪の戒名「傑叟俊英居士」と、裏面に「文化八年未六月十九日」と没年が刻まれており、同墓所には芝溪の祖父母、父母、妻らの戒名と没年月日が大きな一石に彫られたものと、他に養子の大二郎や夭折した一族の子どもの墓が二基あり、弟・翠屏の墓はないとのこと。



道しるべから140m程南にある墓所。芝溪の屋敷跡のわきに建てられた。

写真左 県指定史跡の標識と説明板
中央 芝溪の墓
右 翠屏の墓

上記の場所から170m程東にある墓所。
こちらの墓は家族が建てたものと伝わる。



4 吉田芝溪顕彰碑

御蔭地内



吉田芝溪の子弟で、医者として開業する傍ら私塾を開き門弟を教育した木暮足翁は、吉田芝溪・翠屏兄弟を顕彰するため、芝溪と翠屏のこと、そして吉田家のことを記した顕彰碑を文久元年に元宿の吉田家の墓地に建てました。

この顕彰碑はのちに明保野の芝中公園に移されました。現在も芝中公園の中にあります。

5 極楽院 西善寺

赤城町持柏木地内

天明5年(1785)、周休竹溪が11歳のとき、てい髪して西善寺周弁和尚のもとで仏道・学問を修業しました。周休という名は、師である周弁の一字をもらったものです。

建物はありませんが、敷地には庚申塔や道祖神等の石像物が多く残っています。



6 光明山 常楽院 遍照寺

並木町地内



寺所蔵の文書によると、慶安3年(1650)、存覚法印により創建されました。眞光寺の寺域につくられ、境内・檀家とも眞光寺から分けられました。

寛延期(1748~1751)に本堂・庫裏を焼失、その後再建。周休の代に再び全焼し、再々建されました。本堂は文化12年(1815)の再々建当時のまま現存しています。庫裏や門は昭和63年に建て替えられました。眞光寺の末寺です。

文化元年(1804)、周休は、30歳で遍照寺第12世住職となり、68歳まで同住職をつとめました。周休の代に再々建された本堂の向拝部には高橋蘭斎揮毫による扁額があげられており、本堂の前には周休が自身で建てた寿塔(生前に建てた塔)が残っています。また、お寺の東南側にある墓地には、市指定史跡(昭和57年5月15日指定)となっている「高橋蘭斎の墓」があります。



本堂と向拝部に掲げられた扁額



周休塔(寿塔)側面
「無學道人傳 道人名周休・・・」



高橋蘭斎の墓

7 光徳山 孝顕院 石原寺

石原地内



創建年代不明ですが、寛文3年(1663年)の「西上州群馬郡石原村免田畠水帳」に「諏訪免・寺免(石源寺)」(※源は原文のまま)と書かれているので、1663年以前に存在していたと考えられます。明治8年には石原学校が置かれました。渋川高崎線道路拡幅工事、中村上郷線道路拡幅工事のため度々移転し、現在地へ。眞光寺の門徒寺です。

天保13年(1842年)、周休68歳のとき、遍照寺を退隠し石原村の石原寺住職となりました(2年間)。

8 早尾山 薬王院 延命寺

中村地内



開創は元禄年間(1688年～1704年)、光元法印の開山によるものと考えられますが、開山の地は渋川市の西、五輪平(延命寺平付近)であったと伝えられます。天明3年(1783年)の浅間山の大噴火で伽藍を被災。旧利根川縁(延命寺滝付近：現在の北橋町八崎)への移転後まもなく、利根川の氾濫で流され、現在地へ移りました。現在の伽藍は昭和45年に新築。眞光寺の末寺です。

弘化元年(1844)、周休70歳で中村の延命寺住職となりました(10年間)。
嘉永7年(1854)2月4日、80歳で遷化し、遺骸は遍照寺へ。

9 威徳山 無量寿院 眞光寺

並木町地内

天台宗の関東五ヶ寺の一つ。正式には、「天台宗威徳山無量寿院眞光寺」と言い、比叡山延暦寺の直末寺です。開祖は叡海、創建年月日は不詳とされますが、叡海が開設した渋川談義所について、「明德五年(1394)、渋川談義所において貞海、慶舜、興海などによって『法華玄義』の書写がなされる」と記述された資料があることから明德年間(1390～1394)には存在していたと考えられます。市指定史跡「木暮足翁の墓」の他、県指定重要文化財「眞光寺洪鐘」、市指定史跡「壺銭職の聖徳太子塔」、市指定重要文化財「眞光寺万日堂」等多くの史跡や文化財があります。



眞光寺本堂

周休は眞光寺42世順海(寛政元年(1789)6月入寺－寛政8年(1796)7月13日逝去)に学んだとされ、周休が天明7年(1787)から入って8年間仏教学を学んだ「檀林郷校」は眞光寺のことと考えられます。



文久2年(1862)に亡くなった木暮足翁は、眞光寺境内万日堂北西の木暮家墓地に葬られました。お墓は、大きな自然石を二重に積み、その上に桐と橘を刻む切石の台石を重ねた上に、「木暮賢樹奥墓」と記されている自然石が積まれた、総高約2m程ある墓石です。没後120年の昭和57年(1982)5月15日に、旧渋川市の市指定史跡となりました。

10 蘭齋高橋翁碑

はなかけ
花欵地蔵境内(入沢地内)

明治18年(1885)、堀口藍園など高橋蘭齋門弟等の発起により、伊香保道三叉路に建てられました(のちに入沢の花欵地蔵の境内に移されました)。碑の文章と文字は堀口藍園の手によるものです。



11 石碑「しぶかわ」

渋川駅前広場

渋川駅前広場の北西隅に建てられている「しぶかわ」の石碑を御覧になったことがあるでしょうか。昭和45年8月に渋川駅前に建立され、その後2回の移設を経て、現在に至っています。石碑には次のように刻まれています。

この地の人
せまい所では
人に先を譲る
しかし 大道では
決して
人後に落ちることを
欲しない
ある時代の この国の良さを
渋川の人が 受け継いでいるのは
郷儒堀口藍園翁の感化に
よる所が 大きいと
思われる



12 受け継がれる「渋川郷学の精神」

渋川北小学校、渋川北中学校



藍園像（渋川北小学校）

小学校4年生の社会科副読本「新しい渋川」では、「きょう土の先人たち」「地いきの発てんにつくした人びと」の一人として、藍園が紹介されています。

渋川郷学の教育は、進んで新しい学問知識に取り組み、現実の生活や社会に役立つことを重んじました。

渋川北小学校と渋川北中学校では、現在もその校風や教育理念に「渋川郷学の精神」が受け継がれています。渋川北小学校玄関には堀口藍園像や写真とともに渋川郷学の説明文が掲げられ、敷地内には渋川郷学の教えである「知行合一」「実践躬行」「師弟同行」の石碑が建立されています。また、渋川北中学校ホームページでは、学校の概要を紹介する文章中で「渋川郷学」にふれ、「この地域には江戸時代から明治にかけて渋川郷学といわれる庶民の学問が発展し、多くの優れた人材を育成した歴史がある。そのためか、(略)教育への関心は非常に高いものがある。」と結んでいます。

渋川北小学校敷地内に建てられている3つの石碑



ち こうごういつ
知行合一



じつせんきゅうこう
実践躬行



し ていどうぎよう
師弟同行

◎澁川北小学校玄関に掲げられている「澁川郷学」説明文より

「澁川郷学とは」

江戸時代の末期（安永ごろ）から明治中期にかけて澁川には、師弟関係で結ばれた一連の学者・教育者がいた。吉田芝溪、吉田翠屏、小野里巴水、木暮足翁、僧周休、高橋蘭斎、狩野利房、堀口藍園の諸先生がそれである。これらの先生はいずれも庶民といわれる階層の出身で、「自力で」「自宅に」「自分の教育方針で」私塾を経営し多くの人材を育てた。澁川におけるこれらの一連の学風・教育理念を澁川郷学(しぶかわきょうがく)と呼んでいる。

澁川郷学の主な特色としては次のような事項があげられる。

- ①知行合一を根本に置き、実学的で実践を重んじた。
- ②実践躬行の立場で、郷土の開発、地区の行政、風俗習慣の善導を説き、指導にあたった。
- ③師弟同行の姿勢で学問、教育業務等にあたった。
- ④進取の気象に富み、儒学のほか国学、歌学、蘭学、洋学、農学なども取り入れた。
- ⑤尊王開国論を奉じ建白書をその筋に献じたり勤王活動に取り組んだりした。
- ⑥師の顕章に熱心であり、墓碑をたてたり、著書を刊行したりした。

なぜ、この地にこのすばらしい学問と教育実践、そして行動実践があったのだろうか。気候風土上の条件は決して恵まれていたとは考えられない。三国からの空っ風、榛名赤城の雷、軽石混じりの土壌、利根川や吾妻川の洪水による氾濫など常に自然との苦闘が続いていた土地柄でもあったからである。また、城下町や大名領でもないので規範に則った統制の取れた政治がなされず、宿場町・市場町として現金収入があったり、賑やかな温泉町に近いということでも遊ば場も多かったりして、その日その日をその時々に合わせて過ごせばいいという風潮がまかり通る町でもあった。人々の心に潤いと情緒などは育まれず、文化的な伝統はたいへん貧弱なものであった。だからこそ、心ある先人達はこれを憂え、実学を重んじ、澁川の復興に努めるために、澁川郷学を打ち立てたのではないかと考える。そして、多くの立派な人材を輩出し、その弟子達が師の考えをさらに伝え、自らの仕事に精を出しながら後輩達の指導にあたることにより「澁川に学を為す集団あり」といわれるまでに成長し、所期の目的を達し、今日に至っているのである。

本校の校庭の一角に「知行合一」（昭和54年職員一同）や「実践躬行」（昭和59年職員一同）そして「師弟同行」（平成6年建立）の石碑が建てられている。

また、研究紀要(昭和50年)には「この地には、吉田芝溪先生以来輝かしい伝統の澁川郷学がある。大道をふまえて、徒に理に走らず、実につき、額に汗して、師弟相共に学び行う。これは未長く伝えなければならない」とある。このように本校の教職員は、田部井鹿蔵校長をはじめ伝統的に澁川郷学の精神を受け継いで、真摯に教育実践に努めてきた経緯がある。

◎田部井鹿蔵校長とは

「澁川郷学」という言葉は、戦前に澁川小学校長をした田部井鹿蔵氏(1880-1955)がその著述の中で述べたもので、澁川市誌での説明においては、「(田部井氏は)おそらく郷土に根ざした特色ある教育と学問という意味から『郷学』ということばを使ったのであろう。」としています。鹿蔵は館林市に生まれ、大正7年(1918)に澁川小学校長に就任し、澁川郷学の研究を行いました。



澁川北小学校校庭にある
田部井鹿蔵校長の胸像

※「澁川小学校」は、明治6年8月、当時第十八学区取締であった藍園が区長、副区長と連署し、県令に設立願いを提出し同年8月28日に設立されました。学校は元宿（現在の元町）にある林徳寺があてられました。その後校名変更等様々な変遷を経て明治43年に現在地へ校舎竣工、昭和29年の町村合併で澁川市となり南小学校が分離新設され「澁川市立北小学校」に、平成18年の市町村合併で新澁川市となった際に現在の「澁川市立澁川北小学校」に校名を変更しています。

13 堀口藍園印章・藍園詩鈔版木

澁川市立図書館所蔵

市指定重要文化財 昭和62年2月27日指定

印章は97個あり、子や孫の印章も含まれます。印材は石が最も多く、木や銅・水晶などもあります。「藍園詩鈔」の版木は39枚あり桜材でできています。門弟らが明治18年(1885)、藍園の漢詩のうち319編を選び、上中下3巻として刊行した詩鈔の版木です。



堀口藍園印章



藍園詩鈔版木

これらを所蔵している図書館の玄関外、すぐ北側に標識と説明板が建てられています



14 堀口藍園生誕の地

裏宿地内



裏宿信号のすぐ近く

生家跡に、「生誕の地」と書かれた看板が建てられています。藍園は澁川宿の紺屋・堀口柳蔵の長男として生まれました。家は代々紺屋(染物屋)を営み、藍園は家業のかたわら学業を教えていました。



15 金欄橋

平沢川(裏宿と上郷の間)に架かる橋

「らん」の漢字は異なっていますが、この橋名について、「澁川市の地名」では、「澁川郷学者堀口藍園ゆかりの金蘭吟社きんらんぎんしゃから名付けられたのか、藍園墓地に行くにはこの橋を渡った。」とあります。金蘭吟社は藍園門下の、兄弟のように厚い交友関係で結ばれた懇親と意見交換の会として設けられていました。



現在の橋は昭和54年3月完成。昔は土橋だったそうです

16 のぼりわく 幟 杵、幟 杵の道

上郷地内

渋川八幡宮の祭礼時には、堀口藍園書^{はちまんおおかみ}の八幡大神の幟を石柱の幟杵に上郷の人総出で立てたと伝えられます。また、幟杵の前の南北に走る道のことを「幟杵の道」と呼んでおり、かつては幟杵の道を境に、西側が天領、東側が真光寺領とされていました。

写真左 藍園墓地東側。道の入口
右 道沿いに残る一対の幟杵



17 藍園墓地の大ケヤキ

上郷地内

県指定天然記念物 昭和27年11月11日指定



ここに藍園のお墓があるため、森をなしていた頃は、「藍園の森」とも呼ばれていたそうです。

藍園の墓の傍らにあるため、「藍園墓地の大ケヤキ」と称されます。樹齢は約600年と言われ、かつては樹齢200年以上の杉数本とともに森をなしていました。昭和34年（1959）の伊勢湾台風の時に杉は倒れ、この大ケヤキだけが残りました。根元周りは14m、目通り周8.7m、樹高11m、枝張りは東西12m、南北14m。昭和38年までは樹高が27mありましたが、幹の空洞化が進んだため、主幹の地上9mを残して伐採されました。幹を治療して樹勢を保っています。

18 堀口藍園の墓

上郷地内

県指定史跡 昭和27年11月11日指定

藍園墓地は平沢川の南、上郷の岡の一角にあり、藍園の墓は大ケヤキの西約10mのところ、西向きに建てられています。正面には「堀口藍園之墓」と刻字され、側面及び裏面には生年月日や没年月日・享年とともに、「名は貞歙^{さだはる}、字は張卿^{ちやうけい}、五郎兵衛」と称し、藍園は号である^{おくりな}こと、父柳蔵や亡母、高橋蘭齋と木暮足翁という師の名、藍園の人となり、諡^{おくりな}などが刻まれています。

写真右はお墓の裏面



19 祭龍祠

大山祇神社（石原地内）

慶応4年(1868)6月17日に岩鼻県が設置され、藍園と親交があった大音龍太郎が初代県知事になりました。大音県政の評価は大きく2つに分かれています。多くの人を斬首の刑に処すなど恐れられる政治をして明治元年(1868)12月に罷免となった一方、善政もしたと伝わります。

大音は藍園と親交がありましたが、それは大音の師匠、箕輪龍門寺住職・牧野再龍と藍園の親交があったことが元にあります。再龍によると、取水に苦しむ石原村の年貢米を10年間、三分の一減ずるよう大音が裁断したことに感謝して村人たちが彼の石祠を建立し徳を讃えようとしたとし、その手はずを藍園が整えたということです。

大音の善政を忘れないようにするために明治2年に建立された「祭龍祠」は現在も大山祇神社に残っています。また、同社には藍園門下生が石原八景を漢詩に詠み明治19年(1886)に奉納した額も残っています。



石原の総鎮守 大山祇神社



祭龍祠 (左) と案内碑 (右)

渋川市誌によると、石原地内の三島神社境内にも、大正9年9月建立の「祭龍令大音龍太郎君霊」と記した石碑があり、大音が大正元年11月東京で病没したのを聞いた地元の有志が、彼の遺徳を偲んで建立したということです（地図No.24）。



20 渋川八幡宮

入沢地内

江戸時代の神社は別当寺が管理し神仏習合が行われていましたが、明治維新による神仏分離政策により、八幡宮は神官の手に移されました。

藍園は神官になりませんでした。その家を継いだ藤造(藍園孫の堀口ソウの夫)が渋川八幡宮の、藍園の異母弟・貞敬が伊香保神社の神官になったと渋川市誌に記されています。



渋川八幡宮・・・建長年間(1249～1256)に渋川義頭が渋川に館を構えたときに鎌倉の八幡宮を勧請し、康元年間(1256～1257)に白井城主長尾景熙(かげひろ)が上州入国に際しここに社殿を造営、永正年間(1504～1521)に埴田光重が社殿を再造営しましたが天文年間(1532～1555)中に白井に移住したため、入沢氏がそのあとを継いだと伝わります。また、入沢家文書では、寛政年間(1789～1801)は眞光寺末寺の如来寺で管理されていたとあります。

21 堀口藍園翁碑

渋川八幡宮（入沢地内）



堀口藍園翁碑（左）と藍園先生贈位碑

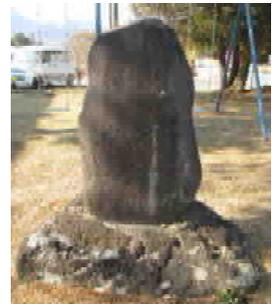
門下から各界に多くの人材が出て、郷に帰り家業を継いだ者のうちには戸長、町村長、議員になった者が多くあり、県議会もそれを「牛耳る者は藍園門下である」と言われた時代があったほどでした。明治24年(1891)に藍園74歳で没したあと、明治26年、藍園門弟と地方官民により「堀口藍園翁碑」が建てられました。撰並書は貴族院副議長 細川潤次郎男爵、篆額は枢密院副議長 東久世通禮伯爵でいずれも藍園と親しい人物でした。大正13年(1924)に藍園へ従五位が贈られたため町を挙げて奉告祭が催され、「藍園先生贈位碑」が建てられました。

22 御蔭の松

御蔭公園内（御蔭地内）

渋川から伊香保への途中、折原に「一本松」という老松があり、明治12年(1872)夏、英照皇太后の伊香保行啓の際、皇太后はこの老松の下で涼をとって松を賞賛されたそうです。藍園は「草も木も碑借りてそその榛原や このいでましの御車のあと」と歌を詠み、皇太后がこの松の下でお休みになったことに感激。これを後世まで伝えようと考え、有志らと話し合って「御蔭の松」と命名し、記念碑を建てるようはからったと伝えられます。明治45年(1912)にこの松は枯れてしまい、現在は、「御蔭の松」の切り株と由緒を伝える石碑とが、御蔭公園に残されています。

御蔭という地名について、「渋川市の地名」では、「(英照皇太后の行啓のとき、) 皇太后大夫の萬里小路博房卿が「芝中の松のやどりに千代かけて残るは君の御蔭なりけり」と詠んだので、地名・樹名となった。」とあります。



御蔭の松の切り株(上)と「芝中の松のやどりに〜」の短歌の碑(下)

23 刀川英学校跡

赤城町見立地内

明治10年代になって、キリスト教の普及や中学校の教科として英語の授業が行われるようになったこと、さらに、明治17~18年の条約改正で、外国人の国内旅行、日本人との同居が認められるようになったことなどから、英語の必要性を国民が認識しはじめました。そのような中、群馬県下でも、英学校や英語塾が設立されました。

藍園は、明治19年(1886)の刀川英学校開校にあたり祝詩を書いて贈り、藍園の祝詩を表装した掛け軸が同校の応接室に数十年後まで掛けてあったと横野村誌に残っています。また、翌明治20年、藍園は甥の小野沢慎吾を同校へ通学させるため、通学の依頼状を宮田の角田儀平治に寄せたとのこと。同じころの渋川では、藍園門下の石坂雄吾（「異母妹・アサが嫁いだ石坂家」参照）が明治20年に長塚町に渋川英語学校を設立したほか、明治16年~32年にかけて4つの英語塾が設立されています。

(その他の御紹介)

◎小栗上野介日記及び家計簿

個人所蔵

県指定重要文化財 昭和31年6月20日指定



小栗上野介忠順^{ただまさ}（文政10年～慶応4年（1827～1868））は幕末期の旗本で、勘定奉行などを歴任しました。戊辰戦争が始まると、主戦論を展開しましたが、退けられて罷免されました。慶応4年（1868）隠居先の上州権田村で官軍に捕らえられ、取り調べもなく烏川で斬首されました。日記2冊は、慶応3年（1867）から処刑される4日前までのもので、大名や名士の往来の状況が記されています。家計簿は嘉永3年（1850）～文久3年（1863）の間の4冊があります。

上州諸藩の軍事的指揮権のすべてを握った大音龍太郎の命により、藍園の子・堀口文平や後藤八郎右衛門らが権田村に行き、小栗の残した荷物の整理をしました。このとき、大音の許可を得て渋川へ持ち帰られた書物の中にあっただのが、この小栗上野介日記及び家計簿です。この小栗の日記等は、当時朝敵とされた小栗の所有物であったため筐底に秘蔵されていましたが、郷土史研究家の本多夏彦が昭和27年9月、史料調査の折に発見し、世に出ることになったとのことです。

小栗上野介日記及び家計簿に関するお問合せは渋川市文化財保護課（電話52-2102）へ。

（生涯学習課からお願い）

藍園さんは先師や師匠の顕彰に尽力し、お盆などにお祀りやお墓参りをしていたと言います。

それにならい、顕彰展開催に当たっては、今渋川で暮らす私たちの先師とも言える渋川郷学の師匠たちのお墓参りをして、顕彰展を開くことを墓前報告するとともに、大変失礼ながらお墓を写真に収めさせていただきました。

師匠たちのお墓は群馬県や渋川市の指定史跡に登録されているものが多く、敷地内には標識や説明板が建てられていますが、ほかの方のお墓もある墓地内であったり何よりお墓でありますので、お参りするときにはどうぞマナーをお守りくださいますようお願いいたします。

「ゆかりの地めぐり」資料は堀口藍園顕彰展開催に当たって作成した資料に加筆、修正を行ったものです。

○堀口藍園顕彰展開催協力

鈴木喜代様、堀口靖之様、石坂延子様、渋川八幡宮様、渋川北小学校

○堀口藍園顕彰展主な参考・引用文献等

昭和31年群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会発行「群馬県勢多郡横野村誌」/昭和51年11月3日渋川市郷土史研究会発行「郷土渋川第3号」/昭和56年2月1日渋川市発行 歴史写真集「目で見る渋川 明治大正昭和」/昭和56年3月1日岸八一発行 藍園詩鈔 訳・註・書/昭和57年6月30日渋川市郷土史研究会発行「郷土渋川第9号」/昭和61年3月31日渋川市発行「石像物と文化財」/昭和62年3月31日子持村誌編さん委員会発行「子持村誌」/昭和63年3月15日渋川市発行「渋川市の建造物」/平成3年3月31日渋川市発行「渋川市誌第3巻 通史編・下 近代・現代」/平成5年3月31日渋川市発行「渋川市誌第2巻 通史編・上 原始～近世」/平成6年6月30日渋川市発行「まんが渋川の歴史」/平成13年3月31日渋川地名研究会・渋川市教育委員会発行「渋川市の地名」/平成20年6月20日絵と本の木かげ館発行「澁川の華」/平成22年3月1日鈴木喜代編集発行「ふるさと讃歌」（改訂版）/令和3年3月26日渋川市教育委員会発行「新しい渋川第四版」（小学校の副読本）/渋川北小学校資料室所蔵「渋川市教育研究所渋川郷学調査研究部発行 堀口藍園先生物語」の原稿/渋川市HP「旧渋川市地区の指定文化財」（参照 2025-01-24）/渋川北小学校HP「沿革史」、渋川北中学校HP「学校の概要」（参照 2025-01-24）

加筆・修正に当たっては、上記資料を再参照したほか、藍園以外の4人の師匠顕彰展で作成した資料を参考として、引用等を行いました。